JICA ジャイカ
61 2015年 夏号
2015年 7月1日(水)発行
HOKKAIDO INTERNATIONAL CENTER(OBIHIRO)
JICA北海道（帯広）ニュース
「もしり」とは、アイヌ語で大地の意味。
北の大地から、国際協力の「今」を伝えます。
http://www.jica.go.jp

青年海外協力隊 発足50周年

青年海外協力隊事業は、1965年4月にわが国政府の事業として発足しました。事業の実施は当時の海外技術協力事業団に委託され、同事業団の中に日本青年海外協力隊事務局が設置されました。その後、1974年8月にわが国政府が行なう国際協力の実施機関として国際協力事業団（JICA:Japan International Cooperation Agency（現国際協力機構））が発足し、その重要な事業のひとつとして受け継がれました。
青年海外協力隊は、開発途上国からの要請に基づき、それに見合った技術・知識・経験を持ち、「開発途上国の人々のために生かしたい」と望む方を募集し、選考、訓練を経て派遣します。その主な目的は、(1)開発途上国の経済・社会の発展、復興への寄与、(2)友好親善・相互理解の深化、(3)国際的視野の涵養とボランティア経験の社会還元です。ラオスへの初派遣から始まった青年海外協力隊事業は、発足以来約50年間で88カ国（アジア、アフリカ、中東、中南米、大洋州、東欧）へ、計40,270名（2015年4月30日現在）の隊員を派遣しています。

小疇 浩 さん

派遣先:ケニア
派遣期間:1981～1984

派遣前の駒ヶ根訓練所での語学研修

協力隊時代の活動内容

ケニア人教員の育成、学生への講義、実験実習を担当し、日本的な実技重視の農学教育をケニアの状況に合わせて導入することを目指しました。

協力隊時代の思い出のエピソード

ケニアの技術教育は、国家試験によってディプロマ資格が授与される制度です。英語の得意ではない日本人教員が中心になり実技重視で指導したため、国家試験対策が十分に行えず、第一期卒業生15名のうち、5名しか合格しませんでした。しかし、そんな卒業生は、その後、食品加工の実業家として成功する者もおり、食品産業界を担う重要な役割を果たしています。

現在の仕事内容

食品工学の教育・研究と、国際教育を担当しています。大学のある十勝や北海道の農産物を主な研究対象としています。また、できるだけ多くの学生に海外を体験してもらおうと、海外での実習・研究調査等の機会を提供し、これからの国際協力を担う人材育成にも努めています。更に、留学生の受入れや、国際交流・共同研究も積極的に行っています。

渡部 貴聴 さん

派遣先:パプアニューギニア
派遣期間:2000～2002

飼育魚の生育調査へ向かう途中

協力隊時代の活動内容

職種は「養殖」で山の中の水力発電用のダムで鯉の網生け簀養殖の技術指導と普及事業を行いました。

協力隊時代の思い出のエピソード

私の任地はダムのために作られた小さな集落で日本人は私だけであり、近隣隊員の任地までも遠く交通の便も悪かったため、赴任中は任地で現地人と過ごす時間がほとんどでした。そのため帰国時には現地語（ピジン語）が隊員の中で一二を争うほど上達しましたが、日本語が出てこなくて、帰国の際のJICAオフィスでの面談で日本語の語彙に非常に苦労したことを覚えています。

現在の仕事内容

私の現在の職業は網走市役所で水産専門職（水産技師）をしています。協力隊員時代は鯉を現在はナマコやホヤなどの水産生物の増養殖や試験研究補助などの仕事を行っています。自分の専門分野の仕事に付けたことは非常に運が良かったと思っています。ただ、帰国後は得意だった「ピジン語」を使う機会が全くないことが非常に残念です（笑）

畠山 裕恵 さん

派遣先:ウガンダ
派遣期間:2009～2011

村の女性たちと一緒に

協力隊時代の活動内容

改良かまどの普及、小学校での衛生指導、村の女性が作る編みかごのデザイン改善や販路開拓で現金収入の向上を図る活動、配属先の組織改善に従事しました。

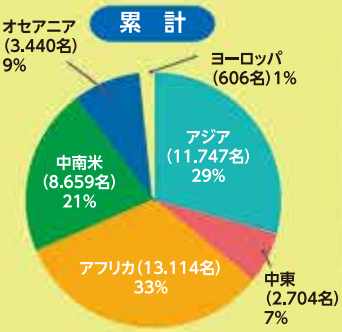
協力隊時代の思い出のエピソード

お金や物を下さいと言われることが多い中で、そういった要求はせず、村の女性が普通に接してくれて嬉しかったです。その村はバスケットを編むための材料がよくとれる地域で女性たちはかごを編むのがとても上手であったため、首都カンパラで販売を提案。販路開拓やデザイン向上のアドバイスをさせていただきました。前向きに頑張る女性たちと出会い、楽しく活動できたのはよき思い出です。

現在の仕事内容

浦幌町地域おこし協力隊として、若者が浦幌町に定住できるよう、新たな職業やビジネスを生み出すための取り組みに従事しています。現在浦幌の町花であるハマナスの商品開発に携わっています。ウガンダで、手探りで色々取り組んでいたことや、色々な方にお話しを伺って前に進んだ経験が活かされていると感じています。

累計



青年海外協力隊派遣実績

派遣実績	88ヵ国	
派遣中の国	71ヵ国	
派遣中の隊員数	1,989名	男 862名 女 1,127名
累計隊員数	40,270名	男 21,791名 女 18,479名
派遣中の隊員数（北海道）	99名	男 38名 女 61名
累計隊員数（北海道）	2,045名	男 1,095名 女 950名

2015年4月30日現在

50周年記念パネル展開催予定

期間	場所
6/27～7/12	北見パラボ催事場 ※27日のみ「オホーツクふれあい広場会場」
8/1～8月末	帯広畜産大学　かしわプラザ
9/17～(予定)	芽室赤レンガ倉庫
10/13～19(予定)	帯広市役所

その他、網走市や釧路市等でも開催予定!

世界から日本へ 研修員eye アイ

JICA北海道（帯広）には、研修員受入事業として開発途上国で必要とされている知識や技術を学ぶために各国から研修員たちが来日しています。彼らは帰国後、自国の発展のために指導的な役割を果たすことが期待されています。

ウガンダからやって来たジェミマさん

〈ウガンダ共和国〉

畜産物の衛生管理・品質管理
■名前:ジェミマさん
■出身:ウガンダ共和国

Agandi（アガンリ）
（ウーニャンコレ語で"こんにちは"）

Q1 ウガンダってどんな国?

アフリカにある赤道直下の国で、コーヒーや綿花の生産が盛んです。私は国の獣医局で薬の開発や病気の検査をする技師をしています。

Q2 研修員として来日することになったきっかけは?

ウガンダではJICAによる多くのプロジェクトが進められています。私は現地のJICAプロジェクトで働いたのがきっかけで、研修員に応募しました。

Q3 JICAで学んだことをどのように国で活かしたいですか?

日本の畜産業は、ウガンダと比べようもなく進んでいて、日本のような先進的システムを早く導入できるようにしたいです。

Q4 日本滞在中、驚いたことや印象的だった出来事は?

東京スカイツリーの高さにびっくり!浅草で人力車に乗ったり、電車に乗ったことがとても楽しかったです。

～JICA研修を支えてくださっている方をご紹介します～

課題別研修
「畜産物の衛生管理・品質管理」コース
コースリーダー　帯広畜産大学名誉教授
三上　正幸さん

札幌研修旅行

Q1 国際協力（JICA研修事業）に携わるようになったきっかけを教えてください。

38年前にJICAの中期専門家研修を受けたことです。30人の定員に3人の欠員が出た時、当時帯広畜産大学田島重雄教授からの紹介で、大学から3人が参加することになりました。田島教授はパリのユネスコの農業教育部長を歴任された国際的な方で、帯広畜産大学で文部省主催のユネスコのアジアの農業教育者の会議が毎年開かれるようになり、1987年頃に文部省からJICA研修である「酪農振興コース」の話があり、携わるようになりました。

Q2 JICA研修に対してどのような想いでご協力いただいていますか?

研修の講義や見学では多くの方々にご協力して頂いています。初めて依頼する時は電話ではなく、できるだけ直接本人に会って、お願いしています。特に大学の先生は忙しいので、断られないようにしなければならないからです。

Q3 思い出に残っている研修員がいましたら国やエピソードを教えてください。

最初の「酪農振興コース」は帯広にJICAセンターのない時代でした。研修員は市内のホテルに泊り、朝晩乗合バスで通っていました。期間は11-12月であったので、段々寒くなり、履くものや着るものも冬支度にしなければならないです。それも充分ではなかったので、後半は寒いバス停で震えながら待っていました。ソーセージの加工実習では、水落しをしなくても良いように、前日から燻煙機のガスバーナーを焚いて、工場内を暖めて行ないました。他の先生も「こんな寒い時にやりたくない」と不満がでて、2回目からは9-10月頃の暖かい時期に変更しました。現在は帯広にJICAセンターができて、バスやタクシーで送迎されているので、恵まれていると思います。

ルワンダ訪問時に研修員と

ボランティアの現場から

青年海外協力隊

近江　佳永さん
派遣国:ウガンダ
出身:芽室町
職種:コミュニティー開発
派遣期間:2014年1月～2016年1月

井戸修理を実施した村の住民たちと

Oli Otya!

（現地語であるガンダ語で、How are you?の意味）

東アフリカに位置するウガンダへ赴任し、早いもので約1年5か月が経過しました。任地であるムベンデ県は、首都からバスで約二時間半の地方都市。丘陵地帯で緑が豊かな町です。ナカイマツリーという樹齢1500年の木があり、この木にお祈りをすると双子が生まれる?!ことで有名な町です。そんなムベンデ県が抱える課題の一つは、安全な水へのアクセス。約68万人が生活するこの県で、安全な水を確保できているのは約40%です。また、ウガンダでは水道以外の井戸などの水源については、住民自身で維持管理をしていかなければなりません。そこで、現在は「住民自身が水源の維持管理を出来るようになること」を中心に活動中です。具体的には、①井戸などの水源の修理支援、②井戸の維持管理を行う住民組織（水管理組合）の組織強化を行っています。例えば、壊れた井戸のある村を訪問し、住民から修理費用を回収します。そこにJICAの活動支援経費を補填して井戸修理を実施する、等です。住民からも修理費用を集めることで、井戸に対する住民自身のオーナーシップを高め、今後の故障の際には彼ら自身で修理できるよう働きかけます。住民の行動変容を促すことは容易ではありません。また、私の任期も残り約7か月と限られていますが、地道に住民たちと対話し、一歩ずつ進んでいきたいと思っています。

ため池の濁った水を汲む子どもたち